

太平記

卷第十六

日本朝敵の事

(前略)又天智天皇の御宇に藤原千方のちかたといふ者あつて、金鬼、風鬼、水鬼、隱形鬼おんぎやうきといふ四つの鬼を使へり。金鬼は其の身堅固にして、矢を射るに立たず。風鬼は大風を吹かせて、敵城を吹き破る。水鬼すゐきは洪水を流して、敵を陸地に溺おぼらす。隱形鬼は其の形を隠かくして、俄に敵を拉とりひく。

斯くの如くの神変、凡夫ぼんぷの智力を以て防ぐべきに非ざれば、伊賀伊勢の両国、これがために妨さまたげられて王化したに順ふ者なし。爰に紀朝雄きのともをといひける者、宣旨かうむを蒙つて彼の国に下り、一首の歌を詠よみて、鬼の中へぞ送りける。

草も木もわが大君おほぎみの国なれば

いづくか鬼おにのすみかなるべき

四つの鬼此の歌を見て、「さては我等惡逆無道の臣したに随したがつ

て、善政有徳の君を背き奉りける事、天罰遁るゝ処なかりけり。」とて忽ちに四方に去つて失せにければ、千方勢ひを失うて聽て朝雄に討たれにけり。（後略）

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『校註日本文学大系第十七巻』国民図書